

TOP MUSEUM

東京都写真美術館

TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL 03-3280-0099 FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

TOP Collection

アジェのインスピレーション ひきつがれる精神

TOP Collection Eugène Atget: The Eternal Inspiration

2017年、12月2日（土）～2018年1月28日（日）



エジュヌ・アジェ《日食の間》

1912年

ゼラチン・シルバー・プリント

東京都写真美術館では開館当初からウジェーヌ・アジェ作品を収集し、現在150点をコレクションしています。これまで様々な切り口でアジェの作品を紹介してきましたが、本展では、アジェがこの世に遺した20世紀前後に捉えたパリの光景の写真が、なぜ現在多くの写真家たちに影響を与え、魅了してやまないかを考察します。20世紀から現在に至るまで長きに渡って受け継がれてきたアジェのスピリットとはいったい何なのでしょうか。当館の約3万4000点を誇る多彩なコレクションより、アジェ自身の作品と20世紀から現代に至るまでの作家たちの作品、そして写真集や資料等によって検証します。

出品作家

ウジェーヌ・アジェ、マン・レイ、シャルル・マルヴィル、アルフレッド・スティーグリツ、ベニス・アボット、ウォーカー・エヴァンズ、リー・フードランダー、ジャン=ルイ・アンリ・ル・セック、荒木経惟、森山大道、深瀬昌久、清野賀子（12作家）

出品点数

約155点（予定）

写真の歴史に燐然と輝く、 ウジェーヌ・アジェの功績

本展覧会はフランスの写真家、ウジェーヌ・アジェ(1857-1927)が後世の写真表現にどのような影響を与えたかについて考えます。当館所蔵の作品と写真集などの資料によって、アジェ自身の作品とアジェ以後の写真家たちの際立った作品を中心に、その輪郭を浮び上がらせようとするものです。

ウジェーヌ・アジェは19世紀末から20世紀初頭にかけて、パリとその周辺を捉えた写真家です。1898年、41歳の時から30年間にわたって8,000枚以上の写真を撮影し、歴史的建造物や古い街並み、店先や室内、看板、公園、路上で働く人々など、近代化が進み、消えゆく運命にあった「古きパリ」を体系的に記録し、図書館や美術館、博物館などの公的機関や画家、建築家等のアーティストたちに販売しました。その顧客にはレオナール・フジタもいます。

晩年から没後に評価されたアジェ

アジェは孤高の写真家と称されることも多く、ひとり黙々と撮影に取り組みましたが、亡くなる2年前頃よりにわかつに注目されはじめます。偶然にも、同じ通りにスタジオを持っていたマン・レイがアジェの写真からシュルレアリストと共通するものを感じ取り、『シュルレアリズム革命』誌に取り上げたのです。この頃から、アジェの作家性にスポットライトが当たりはじめました。

さらに、当時、マン・レイの助手をしていたベレニス・アボットによって、アジェの存在は世界に波及していきます。アジェの死後、散逸の危機にあったプリントやガラス乾板を、もうひとりの貢献者であるニューヨークのギャラリスト、ジュリアン・レビイの助けを借りて買い取り、アメリカで広めていったのです。その後、写真史家や美術館のキュレーターたちによって研究が進められ、アジェは近代写真の先駆者として位置づけられています。

多くのアーティストに影響を与えたアジェ その謎はいまだ多い

しかしながら、アジェはいまだに謎めいたところのある写真家です。ニューヨーク近代美術館写真部門のディレクターだったジョン・シャーカフスキは「ウジェーヌ・アジェ[…]、その人物について、我われには、わずかに信頼できる一握りの事実があるだけだ。それらはおおよそ不透明であいまいなもので、研究者たちは、そのことをきびしく穿鑿(せんさく)してきたが、そのほとんどは分からずじまいであった」(ジョン・シャーカフスキ「序文」『ウジェーヌ・アジェ写真集』[原信田実訳、岩波書店、2004]と、かつて述べているように、生前のアジェ自身のコメントがあまり残されていないこともあり、彼の作品について多くの人たちが様々な想像を巡らせ、その真実に迫ろうとしてきました。

アジェに憧憬を抱き、手本としてきた写真家たちは後を絶ちませんが、彼らがアジェの写真に見出したものはいったいなんだったのか。本展は、アジェの同時代の写真表現と、アジェの先達となる写真家の作品も併せて展示し、紐解こうとするものです。



マン・レイ 《醒めて見る夢の会》 1924年
ゼラチン・シルバー・プリント

ウジェーヌ・アジェ 略歴

1857年、フランス南西部リブルヌに生まれる。幼い頃に両親を亡くして孤児となる。

1879年、パリ国立演劇学校に入学するが、翌年、兵役のため中退。

1887年頃にフランス北部ソンムに移り住む。写真を始めたのはこの頃と推測される。

1890年初頭、パリに戻ったアジェは、アパートのドアに「芸術家のための資料」という看板を掲げて写真を売り始めた。その中で、19世紀に世界の首都として繁栄を極めたパリの古き良き部分が、次第に失われてゆくのを目の当たりにし、1890年の終わり頃から写真によるパリのコレクションを始める。

1925年、マン・レイとそのアシスタントであったベレニス・アボット（1898-1991）と出会う。

1926年、『シュルレアリスム革命』誌の7号と8号に、アジェの写真が掲載される。

1927年没。

1928年、アボットが散逸を恐れ1787枚の原版と1万枚のプリントを、ジュリアン・レヴィのサポートを受けて購入。その後、ふたりはアジェの紹介に努めた。

1964年、アボットが写真集『The World of Atget』（Horizon Press Publishers）を出版。

1968年、ニューヨーク近代美術館が、アボット＝レヴィ・コレクションを購入。

1981-85年、ニューヨーク近代美術館が、4回シリーズで回顧展を開催。



<左上>ウジェーヌ・アジェ 《ショワジー館、バルベット通り8番地》 1901年 鶏卵紙 <右上>ウジェーヌ・アジェ 《トリニ館、ケ・ダンジュ通り11番地》 1902年 鶏卵紙 <左下>ウジェーヌ・アジェ 《(木)》 1910-20年 油彩／キャンバス(厚紙に貼付) <右下>ウジェーヌ・アジェ 《フルーリー街76番地、シャベル大通り》 1921年 ゼラチン塩化銀紙(P.O.P)

アジェを評価した4人のキー・パーソン

アジェの才能を見いだした

マン・レイ

シュルレアリズムの鬼才、マン・レイ（1890-1976）。パリのモン・パルナスにスタジオを構え、偶然にもアジェのスタジオのあるアパルトマンと同じストリートだった。1925年にはアジェのスタジオを訪れ、40枚ほど写真を購入した。

彼がアジェと出会った頃は、カメラの技術革新や印刷技術の向上が著しく、新たなフォト・ジャーナリズムの展開やモダニズム的な考え方方が台頭していった。こうした時代の変革と表現におけるムーブメントの中、マン・レイは、アジェの写真によるパリのコレクションにいち早く作家性を見いだす。マン・レイが購入した写真群は、まもなく、シュルレアリスト仲間や当時、マン・レイのアシスタントをしていたベレニス・アボットにも広がっていく。



マン・レイ 《セルフ・ポートレイト》
1932年 ゼラチン・シルバー・プリント

アジェに傾倒 作品の購入・管理・出版に力を尽くした
ベレニス・アボット

ベレニス・アボット（1898-1991）は、マン・レイのアトリエで目にしたアジェの写真に魅了され、少ない収入の中から作品を購入するようになる。アジェの写真はシュルレアリストの機関紙『シュルレアリズム革命』の第7号に3枚、第8号に1枚の写真が掲載された。1927年のアジェの死後、アボットは散逸の危機にあった作品を購入・管理し、出版やプリント制作に尽力するなど、自身の作品制作と同じく、アジェの作品とかかわっていく。

1964年にアボット編集・執筆による写真集『The World of Atget』（ホライズン・プレス）を出版。

アボットは、アジェが行った都市の記録をニューヨークで再現したいと考え、1935年にプロジェクトを開始、1939年に『変わりゆくニューヨーク』（Hazan）を出版した。



ベレニス・アボット 《ウォーター・フロント》〈変わりゆくニューヨーク〉より
1938年 ゼラチン・シルバー・プリント

アジェをいち早くアメリカで紹介した写真ギャラリスト ジュリアン・レビイ

『シュルレアリスム革命』誌でアジェの写真を見て以来、信望者のごとく虜となったジュリアン・レビイ（1910—1980）は、アジェ本人から多くの写真を購入した。アジェと出会った頃のレビイは、ハーバード大学を中退して渡仏、パリでシュルレアリストたちと交流していた。やがてニューヨークでギャラリストになることを決意。世界恐慌の余波はあったものの、1929年にニューヨーク近代美術館（MoMA）がオープンするなど、ニューヨークは新しいものが生まれる機運があった。レビイは帰国後すぐに写真プリント専門のギャラリーに勤務し、そこでアジェの作品をはじめて紹介する。1931年には自身のジュリアン・レビイ・ギャラリーをオープンし、写真をファインアートとして扱うギャラリストのパイオニアとなつた。

アボットがパリから持ち帰り、自身も共同出資したアジェ作品一式をMoMAに販売しようと試みたが、1930年代はまだ写真が絵画と同様に美術館のコレクションになるという価値観が育っていなかった。その後、同作品は1969年にMoMAが購入する。

アジェを近代写真の始点と位置づけ“巨匠”と知らしめた MoMA写真部門ディレクター ジョン・シャーコフスキー

ジョン・シャーコフスキー（1925-2007）は、1962年、当時のMoMA（ニューヨーク近代美術館）の写真部門ディレクターであった写真家エドワード・スタイケンに、後任として引き抜かれた。

シャーコフスキーは、ヴァナキュラー（vernacular）と呼ばれる、地域に特有なものや土地の日常的なものに感心を寄せる写真家、ありふれた風景を昇華させるような写真家に惹かれた。そして、アジェを近代写真の始点と位置づけ、ウォーカー・エヴァンズや、ゲイリー・ウィノグランドという新しく出てきたアメリカの写真家たちとリンクさせ、写真史の大きな流れを創りだした。1969年、ゲイリー・ウィノグランド、リー・フリードランダー、ダイアン・アーバスを取り上げた「ニュー・ドキュメンツ」展はその象徴であった。

そして、シャーコフスキー率いるMoMAの写真部門が1981から1985年に開催したアジェの4つの展覧会「The Work of Atget」と、美しくまとめられた4分冊の展覧会カタログによって、アジェは巨匠と認識される作家となつた。アジェ作品は金銭的にも高く評価され、その地位を不動のものとした。



「The Work of Atget」 Vol.I-Vol.IV（参考図版）

受け継がれてきた、アジェのスピリット。

当館の多彩なコレクションから

20世紀から現代まで、さまざまな作家を紹介します。



シャルル・マルヴィル 《パリ市庁舎、パリコミューンの前》 1871年 鶏卵紙



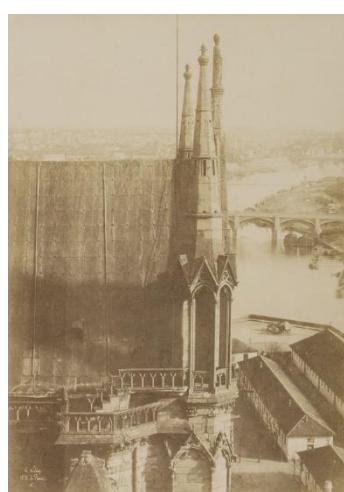
アルフレッド・スティーグリッツ 《三等船室》 1907年 フォト・グラヴュア



ウォーカー・エヴァンズ 《写真家のウィンドウディスプレイ、バーミングガム州、アラバマ》 1936年 ゼラチン・シルバー・プリント



リー・フリードランダー 《キャニオン・ド・シェリー、アリゾナ》 1983年 ゼラチン・シルバー・プリント(参考図版)



ジャン=ルイ・アンリ・ル・セック 《パリ、ノートルダム寺院》 1851年 単塩紙



荒木経惟 〈写真論〉より 1988-89年 ゼラチン・シルバー・プリント



森山大道 《ポスター(中野)》(東京)より 1968-80年 ゼラチン・シルバー・プリント



深瀬昌久 《襟裳岬》(鴉)より 1976年 ゼラチン・シルバー・プリント



清野賀子 〈Untitled〉より 1999年 館山、千葉 発色現像方式印画

確かにぼくは、ウィリアム・クラインやアンディ・ウォーホルの作品にも強く衝撃を受けたけど、それらはいずれも出会い頭のインパクト、つまりヤラレタ！ってものですね。でもアジェの写真はなんかこう、いつの間にかひっそりと、ぼくの身辺に寄りそってくる。(中略)アジェの残した膨大な量の写真全体を見渡せば、その構図のしたたかさや街をとらえる視線のしづとさに脱帽したくなりますよ。つまりアジェと写真との邂逅は決定的だったと思います。アジェの写真は(中略)、ぼくにとっては、限りなく蠱惑的^{こわくてき}的な存在です。

(森山大道『東京都写真美術館ニュース20号』1998年より抜粋)

いまアッジエとエバンスとどっちが好きか、イイかと、二人の写真集をさがしたのだがエバンスのしか見つからない。たしかアッジエは三冊あったはずだ。誰かに貸したままのかな。(中略)んでよー、しかたなくエバンスだけを見る。うーん。ちょっとものたりない。<情交>してない。<私情>がない。やっぱ<私情>がなくちゃね。やっぱアッジエだね。アッジエさん、エバンスなんかと比べちゃってごめんなさい。格が違うもんね。

(荒木経惟『東京は、秋』2016年、P187『アサヒカメラ』1983年7月増刊号の引用より抜粋)

展覧会図録

『アジェのインスピレーション ひきつがれる精神』

東京都写真美術館発行 價格未定

テキスト 鈴木佳子(当館担当学芸員) テキスト再録 横江文憲(写真評論家)

関連イベント

関連トーク「ウジェーヌ・アジェの写真を紐解く」

出 演 横江文憲(写真評論家)

日 時 12月8日(金) 18:00~19:30

会 場 東京都写真美術館 1階スタジオ

定 員 50名 ※当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します。

関連トーク「ウジェーヌ・アジェの写真集をめぐって」

出 演 金子隆一(写真史家)

日 時 2018年1月5日(金) 18:00~19:30

会 場 東京都写真美術館 1階スタジオ

定 員 50名 ※当日10時より1階総合受付にて整理券を配布します。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1、第3金曜日14:00より、担当学芸員による展示解説をおこないます。展覧会チケット(当日消印)をご持参の上、3階展示室入口にお集まりください。

*事業はやむを得ない事情で変更することがございます

開催概要

展覧会名 TOP Collection

アジェのインスピレーション ひきつがれる精神

TOP Collection Eugène Atget: The Eternal Inspiration

主 催 東京都 東京都写真美術館

会 場 東京都写真美術館 3階展示室

東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間 10:00～18:00（木・金は20:00まで）、ただし2018年1月2日・3日は11:00～18:00

入館は閉館30分前まで

休館日 毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館）、2017年12月29日（金）～2018年1月1日（月・祝）

観覧料 一般 600(480)円／学生 500(400)円／中高生・65歳以上 400(320)円

※（ ）は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料 ※1月2日（火）は無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（参考図版を除く）をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

なお、掲載点数が1点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース1ページ目の
ウジェーヌ・アジェ《日食の間》 1912年 ゼラチン・シルバー・プリント をご提供させていただきます。

このリリースに掲載されている作品は、すべて東京都写真美術館蔵です。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

図版のトリミングはできません。

（ご注意）リー・フリードランダー《キャニオン・ド・シェリー、アリゾナ》1983年 は、

参考図版のためメディア掲載はできません。あらかじめご了承ください。

東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tokyo Photographic Art Museum

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当 鈴木佳子 y.suzuki@topmuseum.jp

石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp